

## 16 世紀ヴェネツィアの穀物補給政策

齊 藤 寛 海

### はじめに

16 世紀の地中海世界では人口、特に都市人口の増大による食料不足が時とともに深刻化した。ヴェネツィアもその例外ではなく、世紀初め以降、食糧危機に頻繁に見舞われた。とはいえ飢饉になるたびに、飢えに追詰められた貧民が、食糧を求めて近隣各地からヴェネツィアに流入した。ヴェネツィアは相対的に食糧に恵まれていたからである。食糧危機にさいしてヴェネツィアは、穀物補給を最優先の課題とし、全力でそれに立向かった。失敗すれば暴動がおこり、社会秩序が崩壊する。穀物補給は都市当局にとり、自由放任しうるものではなく、常に監視し、必要なときに介入しなければならない問題であった。では16世紀にヴェネツィア政府はこの問題とどのように取組んだのか。

さて筆者が穀物補給政策についてヴェネツィアを取上げるのは、この都市が広く各地から穀物を輸入する典型的な海港都市であることと並んで、筆者が分析を進めている史料がまさにヴェネツィアのこの問題と深く関わっているからでもある。研究文献としては、文末にあげた参考文献のうち、エマールのものが最も基本的である。それは総花的にこの問題を取上げているが、各局面についての整理は不十分である。問題全体についての整理された輪郭の出現は、今後の研究を待たなければならない。本稿では問題点の所在の確認を試みた。なお紙数の制約により註ははぶいた。

### I 穀物の輸入

16 世紀のヴェネツィアの領土は、A 首都ヴェネツィア、B ドガード（ラグーナの島部・沿岸部からなる伝統的な小領土）、C 大陸領土（テッラ・フェルマ）、D 海外領土、から構成された。この世紀の人口は概数で、A 12～18 万、B 5.5 万（中葉）、C 140 万（中葉）、D 40 万（末期）である。ヴェネツィア政府による穀物補給は A を対象とした。BCD は各自の責任で補給したが、飢饉の時には首都の援助にも依存した。政府は首都市民のほかに、艦隊と領内各地の要塞とに対しても穀物補給の責任を負い、その一部は首都の備蓄の中から

直接供給した。

輸入の対象となる穀物は小麦のほかに、豆・雑穀（legumine menudi）として一括される、キビ、モロコシ、スペルト小麦、ライ麦、燕麦、ソラマメ、大豆などである。豆・雑穀のなかではキビが重要であり、その長期保存性により軍用備蓄として重用された。トウモロコシは16世紀後半に栽培がはじまるが、貧民の常食となるのは17・18世紀である。一人あたりの年間消費量は、小麦なら3（ヴェネツィア）スタイア、豆・雑穀なら4.5スタイアとされた。1スタイオ（複数はスタイア）は80リットル。16世紀後半の穀物輸入の統計表（エマール作製、次頁掲載）にもとづいて計算すれば、小麦と豆・雑穀との比率は、輸入量で小麦86%（1582年）～67%（1580年）、人口支持力で小麦90%～75%である。富裕なヴェネツィアは圧倒的に小麦を多く輸入した。通常の穀物輸入量は首都人口を賄い、なおいくらかの余剰（備蓄・再輸出に回す）がでる位（例、1581年の人口は約142,000人。上記表では同年の輸入穀物の人口支持力は147,370人。86年人口、約154,000人。同年支持力225,238人。）である。ヴェネツィアは大陸領土への再輸出において、豆・雑穀は無制限に認めたが、小麦は $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{4}$ 以下に制限したという。

ヴェネツィアはどこから穀物を輸入したのか。オスマン・トルコの進出以前は、黒海・ギリシア方面から多くの穀物を輸入したという。15世紀にそこがトルコに征服される一方、大陸領土が急速に形成された結果、大陸領土が穀物補給基地として重要となりはじめた。とはいえ16世紀でも、大陸領土からのみでは到底十分とはいえず、海外からの輸入が不可欠であった。なお海外領土（クレタなど）では、ブドウなどの栽培の進展により、16世紀には穀物輸出力がなかった。先の統計表によれば、輸入小麦のうち大陸領土産が海外産を上回る傾向になるのは、ようやく1570年以降である。大量の海外穀物の輸入はヴェネツィアの経済力・海運力によって可能であった。とはいえ海外からの輸入は必ずしも容易ではない。産地政府の輸出許可をえなければならぬし、他の諸国との穀物獲得競争がある。ここでは政治力・外交力がものをいう。ただし産地政府が禁輸をしても、監視体制が不十分な場合には密輸がおこなわれた。

さてブローデルは、地中海世界をめぐる小麦貿易について次のような見取図を描いている。A 16世紀初め以後、北欧小麦がポルトガルに輸入され、60年代以降、地中海に面するアンダルシアにも輸入された。B 16世紀中葉、イタリアでは農業が国内需要をまかなえず、食糧不足が深刻となり、トルコからの小麦輸入が活発となった。だがこの50年代前後のトルコ小麦ブームは、トルコにおける食糧不足の開始により、70年までには終焉した。C 50年以降イタリアでは農業投資が拡大し、その結果60年以降、小麦生産が増大した。同時に、貧民の豆・雑穀への依存が増大したようでもあり、イタリアの自給率が上昇した。D 90年までに、イタリアの食糧危機は深刻化し、北欧小麦の輸入が必要となった。危機は1630年代には軽減されたい。以後、農業投資の増大、収穫量の多いトウモロコシの普及などにより、イタリアと地中海世界は自給化の道をたどる。

ヴェネツィアの輸入市場を具体的にみてみよう。A 大陸領土。16世紀にヴェネツィアの

表 ヴェネツィアへの穀物輸入 (1566-1595年)

収穫年度	総輸入量 A (スタイア)	国産小麦 (スタイア)	外国産 小麦・B (スタイア)	B/A (%)	再輸出 (スタイア)	残量 (スタイア)	消費量 (スタイア)	豆・雑穀 (スタイア)	小麦の 人口支持力 (人)	豆・雑穀の 人口支持力 (人)	全体的 人口支持力 (人)
1566	585 411	(182 118)	403 293	68.89				78 284	195 137	17 396	212 533
1567	475 380	(179 338)	296 042	62.28				69 932	191 126	13 984	205 110
1568	354 170							64 119	118 056	14 248	132 304
1569	333 938							113 643	111 312	25 254	137 566
1570	630 580							124 644	210 193	27 698	237 891
1571	356 663							73 064	118 887	16 236	135 123
1572	465 271							89 893	155 057	19 976	175 033
1573	500 456	(264 176)	236 280	47.21				125 194	166 818	27 820	294 638
1574	534 964	(299 036)	235 928	44.10				159 967	178 321	35 548	213 869
1575	455 296	(320 068)	135 228	29.70				73 542	151 765	16 342	168 107
1576	286 937	(279 325)	7 612	2.65				61 188	95 645	13 597	109 242
1577	399 987							128 967	133 324	28 659	161 983
1578	489 093	(285 288)	203 805	41.67				109 656	163 031	24 368	187 399
1579	425 995	(242 649)	183 346	43.03				165 798	141 998	36 844	178 842
1580	419 991							206 637	139 997	45 919	185 916
1581	411 434	(308 291)	103 143	25.06				91 019	137 144	20 226	147 370
1582	391 732	(277 581)	114 151	29.14				62 595	130 577	13 910	144 487
1583	553 872	(216 593)	337 279	60.90				98 685	184 624	21 930	206 554
1584	362 277	(253 734)	108 543	29.97				99 654	120 759	22 145	142 904
1585	332 330	(204 322)	128 008	38.52				63 177	110 776	14 039	124 815
1586	572 612	251 712	320 888	56.04	19 417	(553 195)	470 334	154 659	190 870	34 368	225 238
1587	566 613	206 055	360 558	63.63	121 161	(444 992)	470 120	262 787	188 867	58 397	247 264
1588	453 453	328 209	125 244	27.62	13 609	(439 844)	456 397	123 052	151 151	27 344	178 495
1589	533 396	407 316	126 080	23.64	8 348	(525 048)	468 439	212 200	177 798	47 155	224 953
1590	(341 827)	265 737	76 090	22.26			419 102	154 456	113 942	34 323	148 265
1591	(534 161)	430 857	103 304	19.34			456 241	113 692	178 053	25 264	203 317
1592	(557 804)	305 928	251 876	45.15			466 955		183 601		
1593	(580 394)	344 110	236 284	40.71			469 425		193 464		
1594	(410 996)	311 964	99 032	24.10			448 056		136 992		
1595		339 120									

原註 1 ( ) 内の数字は資料には直接見当たらないので、筆者が算出したもの。

2 右側の3欄はそれぞれ輸入された、小麦の、豆・雑穀の、両者合計の、人口支持力を人数で表す。

この表は、M. Aymard, Venise, Raguse et le commerce du blé pendant la seconde moitié de XVII<sup>e</sup> siècle, Paris, 1966, pp. 112-113, より転載。

市民、特に貴族による土地所有が進展した。彼らの土地、およびその他の土地の産物が輸入された。B アドリア海の両岸。西岸（パダナ平原南東部、マルケ、アブルッツォ、プーリア）と東岸（アルバニア、ヴェネツィア領ダルマチア）は、プーリアは別であるが、基本的にはアドリア海内部の市場へ輸出した。C レヴァンテ（オトランド以東）。16世紀にはその穀産地はトルコの支配下にあり、食糧不足の拡大にしたがい輸出制限が厳しくなった。黒海、マルマラ海の穀物はイスタンブルが吸収した。アナトリア、シリア、エジプトは、ヴェネツィアにとり重要な意味をもたない。最大の輸入市場はギリシア（トラキア、マケドニア、テッサリア）であった。レヴァンテに行くことは、それまでとはちがひ16世紀には、ヴェネツィア人には冒険的要素がつきまとった。D ポンテ（レヴァンテに対する「西方」、メッシーナ以西）。シチリアは上記プーリアとともにイタリア最大の穀物輸出市場であるが、両者は西地中海方面（ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ジェノヴァなど）に多く輸出した。とはいえヴェネツィアは、レヴァンテ市場が閉鎖されたときには、この両者に依存せざるを得ない。ちなみにシチリアは、地中海世界における穀物貿易の最大の中心であった。南フランスからの輸入は例外的であり、北欧小麦の海路輸入は1590年以降の20～30年間である。

図式化していえば、大陸領土、次いでアドリア海両岸の収穫の多寡が、レヴァンテ、ついでポンテからの輸入の多寡を決定する。具体的にいえば、ある産地で穀物を購入しそれをヴェネツィアに輸送する経費と、ヴェネツィアでのその販売価格との間にある程度以上の差額、つまり利潤が見込まれる場合には、この産地からの輸入がおこなわれる。だからヴェネツィアで価格が上昇すればするほど、より遠隔の、あるいはより高価な産地からも輸入されるようになる。ちなみに地中海世界では穀価は通常、西高東低であったという。

穀物の輸入にとり輸送費の大小は決定的な意味をもつ。陸路ではそれは非常に大きく短距離以外は無理である。遠隔の輸入市場は海路輸送を可能にする地域に限られる。また地中海世界では大都市の多くは海岸ないしその近くにあった。だから穀物の主要輸送手段は船である。さて15世紀中葉以降、地中海のみならず西欧全体で船の小型化現象がみられる。この現象は1530年代まで続き、地中海の緊張が一段落する1570年代以降再び進展したという。各種小型船の形態・名称は地方ごとに変化し識別は容易ではない。その利点は、浅瀬でも接岸可能、短時間でも荷積可能、微風でも出帆可能、などである。自然と人間との危険の少ない安全海域を航海する場合、その経済的効果は大きい。

ヴェネツィアの場合、穀物輸送に使われる船は、（大陸領土の川船を別とすれば）大きく二種類に分類される。A アドリア海内部の航海に特化した各種の小型船。B その外部へ航海するナーヴェ（この場合、特定の帆船をさす）およびガレオーネ（カラヴェラを改良した帆船）。Aの多くは100トン以下。Bはそれ以上、特に穀物輸送に使われるナーヴェの多くは500トン以上である。Aを使って多数の小商人が小口の輸入をし、Bを使って少数の大商人がレヴァンテやポンテから大口の輸入をした。Bには火砲とその要員が積まれることが多かった。

船についてはその雇用市場や売買市場が発達していた。商人は代理人に書簡で指示し、遠

近各港で適当な船を雇用あるいは購入した。食糧危機が深刻化した場合には、政府は穀物輸送に自国の船を動員し、他国向けの穀物輸送を制限ないし禁止した。また各種の海上保険が発達していた。アドリア海内部を移動する小型船には保険をかけないことが多く、外部へ出かける大型船にはかけることが普通であった。保険掛金は戦争、海賊、季節などの状況に応じて上下するが、長期的にみれば、輸送費（船腹の一部ないし全部の雇用費）の場合と同様に、国際相場というべき水準が存在した。保険の対象は、特定航海、一定期間、など多様であったが、ここではこれ以上立入らない。

16世紀中葉の史料では、アドリア海内部を移動する小型船への掛金は、積荷の評価額の2～3%、ヴェネツィアないしラグーザからサロニカないしヴォーロス（テッサリア）を往復する大型船へのそれは、7～12%が標準であった。保険掛金の変動に比べて、輸送費のそれはもっと激しい。飢饉による穀物輸入の急増、和平実現による貿易の拡大、など船舶需要の急増に対して、供給が追付かないからである。ヴェネツィア市場の穀価において輸送費が占める割合は、輸送費の変動と穀価の変動とによって大きく上下するが、ヴォーロスからの輸送費を例にとると、穀価の $\frac{1}{12}$ ～ $\frac{1}{3}$ 位であった。

## II 穀物補給政策

ヴェネツィア市場における小麦価格の変動には、いくつかの異なる種類の型が識別できる。エマールは彼の作成したヴェネツィアの小麦価格（1552～1620年）の変動表にもとづき、A 50年位を単位とする長期変動、B 5～10年位を単位とする周期的・短期変動、を識別し、Aでは16世紀後半における麦価上昇（3倍）を、Bでは上下変動（2～3倍）の周期が5年前後から戦争による下降の遅れにより8～10年に延長したことを指摘した。彼はさらに、C年間変動、も指摘した。輸入小麦は、a 7・8・9月（ちなみにヴェネツィアの収穫年度は7月1日に開始）には大陸領土から、b 11～1月にはアドリア海両岸から、c 3・4月にはレヴァンテやポネンテから、到着する。abcが別々に三つの山をなすことが多いが、abが合体して一つの山になることもある。この年間の輸入量の変動は麦価の年間変動の要因となる。またサルデッラは、個々の事件についてのニュースがもたらす価格変動を分析した。カンブレー同盟の結成、トルコとの政治関係の悪化、などのニュースが上昇の原因となる。ニュースへの主観的反応による一時的なものと、事件の結果客観的に生じる持続的なものとは識別されるべきである。とはいえ両者は、D事件による変動、と一括できるだろう。現実の市場価格はこれら各種変動の相互作用の結果である。

海港都市では、遠近各地からの穀物の大量輸入が可能なので、内陸都市に比べて穀価の変動が緩やかだといわれている。だが絶対的な意味では、16世紀のヴェネツィアにみられるように、変動の幅・速度は非常に大きかった。上記Bでは、5～10年間に2～3倍になる「古典的」騰貴をまぬがれることはできなかった。また遠隔市場から輸入しうるのがヴェネツィアの強みではあったが、その重要部分がトルコの支配に服したので、この市場の作況のみな

らず政治動向にも一喜一憂することになった。これは長距離の海上輸送につきまとう不安とならんで、ヴェネツィア市場に過敏な性格を与えることになった。上記Dがこれをよく示している。

価格騰貴の最初の犠牲者は下層階級である。上層・中層が数カ月～1年分の穀物備蓄をもつとはちがいが、生活に余裕のない彼らは安価な時に備蓄する資力がなくて、高騰に対して身を守る術がない。安価な雑穀が彼らの常食となるが、それが尽きると飢えに襲われる。彼らの暴動を未然に防ぎ、社会秩序を維持するためには、政府の介入が必要となる。食糧危機の進行にともない、ヴェネツィアの穀物局（Ufficio delle biave）は強化され、穀物補給への介入が次第に恒常化した。1526年以降、従来の2人の小麦役人と2人の穀物監督官（貴族を成員とする大評議会より選出）とに加えて、2人の上級穀物監督官（貴族権力の中枢機関たる10人委員会より選出）がその中枢を形成し、強力な執行権をもつことになった。彼らは事務所、下級役人をもち、サン・マルコとリアルトに一つずつ穀物倉庫をもった。ちなみに、1346年の飢饉時のフィレンツェでは、穀物購入のために創設された政府機関に中・小アルテ（中・下層）の代表者のみを選出した。事態が悪化した時、大衆の不満が直接上層（大アルテ員）に向けられないよう配慮した結果である。ここには上層による支配体制の強弱の差異が明瞭に反映している。

政府による穀物の購入、その市民への供給の方法について、エマールはいくつかの具体例をあげているが、それぞれが何時から、またどのような場合に採用されたかなど、つまりその体系については整理していない。ここではその具体例を紹介していく。さて政府は大陸領土に土地をもつ市民に、その土地で収穫した小麦のうち種分と小作取分とを差引いた残りをヴェネツィアに搬入させ、さらにそこから家族の消費分（1人年間3ではなく、4スタイアとして計算）を差引いた残りを、上記二つの政府の穀物倉庫に販売させた。海外からの輸入穀物への関税は通常時でも低く、危機には免除された。その輸入においてヴェネツィアは商人の主導性を尊重した。食糧危機が深刻化し政府の介入が必要になった時にも、商人に様々な恩恵を与えて輸入させる方法を取った。政府自身が直接輸入するのは、危機が異常に深刻化した特別な場合のみに限られた。ちなみにラグーザでは1570年以後、遠隔市場からの輸入の多くは政府が直接おこなったという。

さてその恩恵の内容は大略次のようなものである。A 輸入奨励金。海外（非ヴェネツィア領）からの小麦輸入に対して支払う。金額は輸入先別に異なり、例えばアドリア海両岸には低く、マレーア岬（ペロポネソス半島）以東には高い。輸入を事前に申告した者には全額を、しなかった者には半額を支払う。当局による輸入量の予測・調整を可能にするためである。B 輸入資金の前貸。穀物の購入に必要な資金を前貸し、その金額は産地市場での購入価格に対応した。C 最低買取価格の保障。輸入過剰による値崩が生じた場合、損害から商人を守るためのもの。市価がそれ以上になれば、商人は市価で売却できる。輸入商人はABCの恩恵をもらい、さらに都合のよい種類の保険をかけたから、食糧危機の時の穀物輸入では、経済的な危険は最少限にとどまり、保護された投機という性格をもつことになった。

危機が異常に深刻化したときには、政府はドイツやフランスなどに使節を送り、直接輸入した。例えば1539年8月、政府は莫大な輸送費をものともせず、バイエルンからアルプス越えの陸路で小麦を輸入している。また、ヴェネツィアが領海とみなすアドリア海で他国の穀物輸送船をしばしば勝手に拿捕し、積荷を押収した。その価格と支払い時期とはヴェネツィアが勝手にきめた。

政府は価格の高騰を抑制するために、十分な備蓄による市民への供給の確保と、私人による投機的な買占の排除に努力した。政府購入の穀物は穀物局の倉庫に収納され、一部が備蓄（目標は3～4カ月分）に、一部が市民への供給に回された。小麦の供給は世帯の消費分に限定し、小麦粉の販売という形をとった。小麦粉は小麦（1～2年もつ）よりもちが悪く、投機のための再販が困難だからである。場合によっては、一般市民への販売はせず、パン屋にのみ販売したこともありうるが、（ヴェネツィアの場合）まだ確認できない。パン屋は原料の供給、非組合員の営業禁止、組合員数の制限などの保護を与えられる一方、パンの品質・重量・価格について当局の厳格な規制を受けた。また政府は価格抑制のため、小麦に最高価格を設定した。政府小麦の販売は、その購入原価ではもちろん、時には原価よりも安い価格でなされたのである。食糧危機が深刻化すると、政府の備蓄穀物の取崩がなされ、市民用の小麦は勿論、艦隊・要砦用のキビなども市民に供給された。ちなみに備蓄は市場価格の暴騰を抑制する機能をもつ一方、大量を定期的に更新する必要がある場合には、その販売・購入のために穀物市場を統制する必要があった。また市民世帯の穀物備蓄を政府に申告させ、必要な場合にはその政府への引渡しを要求した。

## おわりに

ヴェネツィアのような強力な都市は、その力を結集して遠近各地から穀物を輸入する。しかし大陸領土の被支配諸都市にはそれだけの力はなく、不足が深刻な場合には補給の一部をヴェネツィアに依存せざるをえない（ただしその詳細は不明）。とはいえヴェネツィアはなによりも自己の充足を優先させるので、諸都市への供給は十分ではなく、そこでは小麦はより高価であり、豆・雑穀への依存がより大きかった。大陸領土の農村の状況はさらに悲惨である。首都ヴェネツィアや（地方）中心都市の市民の土地所有が拡大した結果、農村は折半小作制などの下で従属を強いられた。そこでは収穫物のうち農村に残るのは、種分と小作世帯の取分だけであり、残りは首都や中心都市へ運ばれる。ヴェネツィアは法的規制により、ヴェネツィアへの穀物輸送は促進し、大陸領土内部同士の輸送は禁止した。コンタードの農村は都市に従属し、その都市はヴェネツィアに従属する構造の下では、農村は二重の支配を受けていた。農村には海外から輸入する力はない。農村では飢饉の打撃はより軽かったのではなく、より重かったのである。そこでは小麦はさらに高価であり、豆・雑穀への依存はさらに大きかった。政治的支配のヒエラルヒーは、食糧のヒエラルヒーとなって現れた。飢饉の時、貧農は農村で餓死を待つか富者の家を略奪するか、あるいは都市に流入して食糧にあ

りつくかしかなかった。1538年の飢饉では、ブレシアのコンタードからもヴェネツィアに流入した。彼らは貧民収容施設などで食事にありついたのである。ちなみに、ヴェネツィアは例えばフィレンツェにくらべて、流入貧民の受入には寛容ではなかったという。

食糧危機の頻繁化による穀価の上昇は、ヴェネツィアの経済構造の変革を促進した。トルコの進出、それとの対立という構図のなかで、ヴェネツィアの商業は弱体化した。これを背景としてヴェネツィア市民の大陸領土における土地所有は拡大したが、穀価の上昇がそれに拍車をかけた。16世紀後半には、政府による国有地の改良・開墾とならんで、貴族による私有地のそれが報告されている。また貿易量の低下を背景に、海外穀物の輸入による収支の悪化を防ぐため自給志向が強化され、農民・都市貧民の食糧としてのトウモロコシの導入が促進された。アーサー・ヤングのイタリア旅行記にみられるように、それは小麦などと比べて遥かに収穫量が多く、安価だったからである。貴族など市民的土地所有者のもとで、ヴェネツィア経済の農業化が進行した。ちなみに18世紀になるとヴェネツィアから外国への小麦輸出が実現する。

#### 参考文献

- 1) Dal Pane, Luigi, *La politica annonaria di Venezia*, in, *Giornale degli economisti e annali di economia*, vol. 5, 1946.
- 2) Sardella, Pierre, *Nouvelles et Spéculations a Venise au début du XVIe siècle*, Paris, 1946.
- 3) Pullan, Brian, *The Famine in Venice and the New Poor Law, 1527-29*, in, *Bollettino dell'Istituto di storia della società e dello stato veneziano*, vol. V-VI, 1963-64.
- 4) Aymard, Maurice, *Venise, Raguse et le commerce du blé pendant la seconde moitié du XVIe siècle*, Paris, 1966.
- 5) Braudel, Fernand, *La méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 2e éd. révisée, Paris, 1966; (English Translation, Harper Torchbook ed., New York 1976.)
- 6) Woolf, S.J., *Venice and the Terraferma: Problems of the Change from Commercial to Landed Activities*, in, Pullan, B. ed., *Crisis and Change in the Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, London, 1968.
- 7) Pinto, Giuliano, *Firenze e carestia del 1346-47: Aspetti e problemi delle crisi annonarie alla metà del 1300*, in, *Archivio Storico Italiano*, CXXX-1, 1972.
- 8) Tenenti, Alberto, *The Sense of Space and Time in the Venetian World of the Fifteenth and Sixteenth Centuries*, in, Hale, J.R. ed., *Renaissance Venice*, London, 1973.
- 9) Tenenti, Alberto e Branislava, *Il prezzo del rischio*, Roma, 1985.
- 10) De la Roncière, Charles M., *La vie privée des notables toscans au seuil de la Renaissance*, dans, Duby, Georges éd., *Histoire de la vie privée, II—De l'Europe féodale à la Renaissance*, Paris, 1985.

« RÉSUMÉ »

## LA POLITICA ANNONARIA DI VENEZIA NEL CINQUECENTO

Hiromi SAITO

Nel mondo mediterraneo del Cinquecento, fenomeni di carestia vanno aumentando sempre di più a causa dell'incremento demografico, specialmente nelle città. Venezia si trova molto avvantaggiata nell'importazione di grani, essendo una potente città marinara che può importarli sia dalle regioni più lontane, che da quelle vicine. Ma in tempi di crisi, Venezia doveva concentrare tutte le proprie forze nell'assicurarsi i viveri. Col tempo, il prezzo dei grani aumenta, e la politica annonaria diventa sempre più importante. Lo stato si doveva occupare non soltanto dell'importazione, ma anche della produzione stessa. Questa è una delle cause più importanti di trasformazione della struttura economica veneziana, cioè del passaggio da una struttura basata sull'economia commercio-industria a una struttura basata sull'economia agraria.

Su questo problema, l'opera di M. Aymard è fondamentale. Ma è di carattere generale, e ha lasciato alcuni aspetti della questione a uno stato impreciso. L'autore cerca di rivedere i lineamenti del problema, esaminando lo stato attuale degli studi sulla materia, e di dare spunto a futuri studi sulla politica annonaria veneziana del Cinquecento.